

フレッシュ・コンビが語る！

# 橋幸夫 & 木田ヨシ子



（写真は楽しく語り合う左より木田ヨシ子・橋幸夫）

歌、映画、そしてテレビにと活躍いまや人気NO.1の歌手、橋幸夫さんは、「黒いオルフェ」でレピュートした神戸っ子歌手の木田ヨシ子さん（松陰女子高卒）、リバerval・ソング「無情の雨」で有名な佐川ミツオさんは歌の勉強を一緒に始めたという大の仲よしです。先月、始めて神戸の舞台で歌うという橋さんと、友情出演した木田さん、このフレッシュ・コンビに出演合い間のたのしいおしゃべりをきいてみました。

## ゴキゲンな神戸肉

木田 カゼの具合はどう大丈夫なの？ムリしちゃだめよ。

橋 うん。ちょっとキツイかな。だけど神戸で舞台に立つのはこれが始めてだからガンバりますよ。（前夜からカゼ気味で、熱っぽい顔の橋さんを、木田さんはさかんにいたわつてました。）

木田 舞台が終つたら、いつも私が自慢している「ふるさと神戸」をゆつくり案内しようと思つてたのに、サンネンだわ。

橋 そりや、ボクだってのしみにしてましたよ。二、三度、神戸にはきたことあるんだよ。でもこんどこそ、いつも君がうるさく宣言（笑）して元プラやセンタ―

街、トア・ロード、それに大好きみななどにも行ってみたかったんだけどね。

木田 ホントヨ。私もはり切ってただけにがつかりだワ（笑）でも昨日はスリルあつたわネ。

橋 そうそう、ドンクという喫茶店ではファンの方にも見つからなかつたんだけど、次にいった店、そら、なんていつたつけ？

木田 舶来品のものを売つた店でしょ、『ミツちゃん』。あそこでファンの人見つかり、とりかこまれそうになつたのね。わからぬいようにカモフラージュしてたのに…。

橋 あの時は二人ともずい分走つたね。とめてた自動車のところまでマラソンさ（笑）

木田 かけ足だつたけど、ドライブした六甲山から見た私が自慢する神戸の印象をどうぞ（笑）

橋 いやに改たまるんだナ（笑）

そうですね、海、山あり、波止場あり、それに街が何にかキチンとしていて気持ちいいナ。

木田 どこにいても都心へ出るのに便利だし、お店で出ている品物だつていかしたのがずい分あるじやない？ 好きなスポーツシャツを買いたいと思ってたんだけど、何しろ時間もないし、ゆっくり買ひものもできないんで…。

それとさ、神戸はやっぱり食べものがおいしいよ。肉なんて最高ですよ。もうゴキゲン、ゴキゲン

木田 おほめにあずかりありがとうサンです（笑）

食べものの恨みはこわい（笑） いいけど、約束していた関西名物のお好み焼屋さんにも、この分ではいけそうもないナ。だつて

いくら変装したってさ、すぐアッ橋幸夫たつてわかつちやうでしょ。もう落ちついて食べていいれないものネ、人気ものはツライです。

橋 とんでもない（笑）

木田 どう、始めて神戸でステージに立つたご感想は…：

橋 王子体育館がハチ切れるほど

のファンの方がいらしてくれたので、もうカングギ！ それこそカゼなんか吹つとんじゃいましたよ

木田 热心に応援してくださつたし、君は神戸出身だから、ずい分たくさんのお友だちがきてたようだね

木田 同期生からキレイな花束いただいたし、近所の人たちもたくさん声援にきてくださつたワ。

木田 やっぱりいいな、ふるさと神戸はー。みなさん一生懸命応援してくれた。がんばらないと申しわけない。

クリスマスは歌って、たのしく！

橋 もうすぐ今年も終つちゃうけど。お互いに忙しかつたね。

木田 君は、今年のクリスマスはどうなの？ ボクは残念ながら（笑） ジャズ喫茶ABCに出演なんだ。

木田 私もお仕事があるワ。

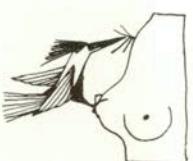
橋 休みなら、歌のこと、映画のことなど仕事を忘れて、家の人たちと一緒に楽しいクリスマスの宵をすごしたいんだけどな。今年のクリスマスは、ボク自身も歌いな

木田 もうことないんだから。今年のクリスマスは、ボク自身も歌いながらファンの方に楽しんでもらえれば何女だ。ギョクラン＝清らかな女だ。バラ＝たおやかな女だ。カイドウ＝酔った女だ。サンチャ＝なまめく女だ。アキアオ＝風雅な女だ。ギョクラン＝清らかな女だ。バラの花もこんな調子。文學者ルナールです。彼にかかる

木田 そらね歌えば楽し。大いに歌つてファンの方たちと一緒に楽しい宵を送るのがやっぱりシ

（T）

ひんくこーなー



ワセなことね。

橋 ゆつくりしたレジャー・タイムもほしいけど、ボクの場合は映画と歌とTVに追いまくられて寝るヒマもないでしょ。好きなボクシングも釣りもやりたいですヨ(笑)

木田 私は、橋さんほど忙しくはないけどさ……。

橋 どうして、どうして、君もなかなか活躍してるじゃない

木田 どういたしまして(笑)ヒマがあればレコードをきてのんびりしたいわ。外へ出るのあまり好きじゃない。

橋 ボクも急にヒマがとれれば家にいるな。どうしてすぐそなうかなんて考へてるうしんじゅうんだよ。結局、ボクはそうしてムダな時間を使いやしてるよ。普通の人のように外へ出で遊ぶなんてまづできないものね。

木田 遊ぶついえば、まず同じ仲間同士つていうことになるわ。とくに地方公演に出かけたときなどは最高ね。

橋 ホント、そら、この五月に北海道へ君や山中さんたちといったときはユカイだつたね。夜おそくまで君たちとオシャベリしたじゃない。レンアイについてあんまり熱中しちやつて、翌日みんな声が出なくなつて大笑いだつた(笑)

木田 あれはケツサクね。よく君たちアキないくらいシャべるなつて笑われたけど。旅先でみんなでいろいろダべるのは楽しいわ。

橋 あの時は、その前にお化けっこ(笑)して騒いだね。君もずいぶんハデに騒いでたじゃない。

木田 いま思ひ出しても、いちばん楽しい旅行だったワ。

橋 来年は、もう少し仕事を整理して、自分が人のものを見ながら勉強できるようにならたい。

木田 私は、いろんなリズムの勉強がしたい。私自身はスローなムードのある曲が好きなんだけど。

だから松尾和子さんのようなタイプが大好きだな。自分の歌で好きするのはやはりレビュー曲の「黒いオルフェ」ね。いろんな思い出があるんだもの。

橋 ボクもレビュー曲「潮来笠」は忘れないよ。『南海の美少年』もボクの大好きな歌だ。

木田 ごく最近の『江梨子』の歌もステキじゃない。私の歌も大好きだわ。

橋 吉田先生のリサイタルで歌つたの。そうだな、僕あの歌は最近のものではゴキゲンだな。

木田 ツメえりの学生服で歌つたワネ。橋さんつて、着物姿もイカスけどサ、あの学生服もとてもよかつたワ。ファンの人たちも騒いでたわよ。

橋 それほどでもありませんよ。ところでサ、君といいやはり神戸出身の佐川君といい、僕とはすい分縁が深いナ。何しろいっしょに歌の勉強を始めた仲間だものね。

木田 来年もみんな仲よくがんばりましょよ。

木田 ほんと、いつまでもお互にはまし合い、仲よくがんばりましょね。

(和香葉荘にて)

## びんく・こーなー



このあいだ、あるグラマー女優の会見記を読みましたが、彼女の立派な衣装よ』なるほど、そうに違ないありません。モンティニーは人間のからだが不完全だから、他の動物から毛皮や羽の『借り着』をするんだといつております。ハダカに自信のおありの方は、これ以上に立派な衣装はありますまい。昔、大昔、ギリシャの三女神ジュノー、ミネルバ、ビーナスがパリスを審判にして美を競ったことがあります。さて、ジュノーの日のイデタチはといえば天の女王らしい『錦繡』を着飾り、誇らかなクショクを従えてのおでまです。そしてパリスに富と権力を約束します。ミネルバはと見れば、照り輝く知恵のヨロイに身を固め、謎のスフィンクスのカブトをかぶり、夜でも自分が見えるフクロウを使としてのサツソウたる登場です。彼女はパリスに決して誤ることのない賢明さを与えることを約束します。最後に現われたビーナスはといえば、これはまたどうしたことか、身に一糸もまとわぬ全裸をもつて出現し、パリスには單に一人の美女の愛を与えると約束します。そこでパリスは迷うことなくビーナスに喜んで賞品の黄金のリングを授与しました。(T)



毛皮の店  
**ウエダ**  
 元町2丁目・TEL③0686

| 45 |

今年もデコレーションケーキ  
 のご用命は……ドンクへ



フランス菓子

**ドンク**

三宮センター街  
 電 3-1750



須磨浦ロープウェイ

初日出は鉢伏山上  
ス

初日の出は鉢伏山上で

■ お年玉贈呈 ▽期間 1月1日～1月3日 (3日間)

▽場所 鉢伏山上 (ロープウェイ初発より)

▽お年玉 每日先着壹千名様に電化製品多数 (空くじなし)

◆ が当たる抽せん引換券を進呈

◆ ロープウェイの運転時間

元旦は 6時15分初発 二日以降は 9時15分初発

▽期間 1月1日～1月7日 (7日間)

▽方法 須磨浦展望閣入場に投句用紙をお渡しいたします

■ お問い合わせと  
お申込みは 三宮案内所(22)二八三〇  
兵庫案内所(5)六九六三〇

山陽電車



きものさろん 西店  
服飾細貨 東店  
きものと細貨 新橋店  
神戸 東京

ちんがら

神戸・西宮店 TEL ⑧8836  
東京・新橋店 ⑨0629  
東京・新橋店 (571) 0807



# 沈んだ欲

## 夕王

陳

え・松

舜

本

宏臣

「浅田さん、大丈夫かね？」伊藤はなんべんも繰返した言葉を、また口にした。

「大丈夫だよ」浅田はきかれるたびに、愛想よく、あかるい誠実な声で答えた。

道らしい道もなく、まわりの樹が途方もなく大きいやつばかり。地面はじめじめして、薄氣味がわるい。はじめての人は、このあたりを人跡未踏の土地と思つてしまふらしい。

「浅田君はこの山の主（ぬし）だぜ。まかせときや万が一にもまちがいはねえ。安心しな」

首に巻きつけたタオルの端で顔を拭きながら、江原が言つた。その語調は、臆病な伊藤をからかっている、と受けとれないこともなかつた。だが伊藤は、そんなことに気をまわす余裕はないらしい。

「二十分ほど行くと、急にひらけた所へ出る。そこを抜けると、ちよつとした難所があるけれど、なあに、時間にして五分ばかりですむんだ。そうだな、道幅は一尺ぐらいで、左手は切り立つた岩、右手は深い谷、断崖絶壁というところだな。しかし眺めはすばらしい。眼下はるかに、清渓が白い泡を立てて流れている。岩の恰好も遭難——という言葉が伊藤の頭のなかで、さきほどから飛びはねてている。こんな道を、はかの人間がかつて通つたというのか……信じられないことだ！ リーダーの浅田はゆっくり構えているが、体面上そうしているにす

ぎないのかもしれない。墜落間際の操縦士は、乗客を混乱させまいと、懸命に最後まで落ち着き払つたふりをするときいたが……。

巨木の群れはわがもの顔に天にむかって聳え、低いところでは、太古を思わせる羊歯類が、所せましとばかり生い茂つてゐる。植物の世界である。こんなところならたとえ百年前に人間が通つても、そのにおいがまだ残つていそうに思えた。それなのに、そんなにおいはちつともしないのだ！

「二十分ほど行くと、急にひらけた所へ出る。そこを抜けると、ちよつとした難所があるけれど、なあに、時間にして五分ばかりですむんだ。そうだな、道幅は一尺ぐらいで、左手は切り立つた岩、右手は深い谷、断崖絶壁というところだな。しかし眺めはすばらしい。眼下はるかに、清渓が白い泡を立てて流れている。岩の恰好もおもしろいしね」

浅田は同行の二人に説明した。

「なかなかしゃれた所らしいな」

そう言つて、江原は機嫌よく笑つた。

伊藤は江原の笑いに釣られて、顔面の筋肉をうごかしかけたが、それは忽ち凍りついてしまつた。「笑い」ではなく「恐怖」をマスクに彫つたような顔になつた。ダンガイゼツベキという言葉が、植物世界の奥底から、卑小な人間を嘲笑するかのようにこだましてきこえた。伊藤は頭がくらくらして、登山に来たことを、あらためて後悔したのだった。

しかし浅田が言つたとおり、広いところ、すなわち巨木の魔手の及んでいない場所に出たとき、伊藤はホッと息をついた。

妙な顔をしたのは、浅田であった。

「あれはなんだろう?」

浅田の指さす方向に、伊藤と江原も目をむけた。屏風のような赤い岩肌の壁が左手をさえぎつてゐる。その根もとに黒々としたものが堆と積まれてゐるのが見えた。

浅田がまっ先に駆け出した。彼は途中でふりかえつて「飛行機の残骸だよ。遭難したらしい」

ソウナンという言葉が、またしても伊藤の脆弱な神経をおびやかした。

「ほほほ、まだかすかに煙があがつてゐるぜ。遭難していくらも経つていねえな」

江原が小手をかざして言つた。

「生存者がいるかな?」浅田は足を早めた。

浅田は目的物のそばに着いた。

「旅客機じゃない」彼はあとから来た二人に自分の意見を述べた。「そんなに大きなやつじゃない。小型の飛行機だ」

黒焦げの残骸は案外つましやかな量しかなかつた。

「ヘリコプターかな?」と江原が呟いた。

「そうじゃない」浅田は自信ありげに首を振つた。

「ヘリコプターよりは大きい。飛行機にはちがいなさそうね」

まだ余燃のくすぶつてゐる黒い物体のまわりを、浅田はぐるぐるまわつて点検してゐたが、やがて立ちどまつて、「生存者なし」とおごそかな声で言つた。——「どうやら一人乗りらしい。遺体はここに一つしかない」

江原はそこへ走つて行つた。伊藤はうごかなかつた。うごけなかつた。

「焼けていいねえな。や、それにこりや外人だ。アメリカの軍用機かな?」と江原が言う。

「きっと墜落したはずみに、ほうり出されたんだ」と浅田が説明する。「ほら、機体からだいぶ離れてゐるだろ。すごい爆風で飛行服なんか剥がれちまつていて。ほら、そこにちぎれたきれ端がある」

伊藤は寒気がしてきた。がくがく顫えてゐる彼の足もとに、飛行服の断片、それもかなり大きいのが、なにかばかりにかくれてゐるのが見えた。

「あっ!」と彼は思わず悲鳴をあげた。

「どうした?」と浅田が近よつて来た。

伊藤は物も言えず、ただ足もとを指すばかりである。

彼の唇はむなしくピクピクうごいた。

浅田はいたましようにそれを見て、「ああ、ここにもあるのか……」と言つた。

江原もやつて来て、かがみこんでそれに手を触れた。

「これは襟の一部か……や、胸のポケットあたりまであるぞ。ポケットになにかかたいものが入つてゐる」

江原はそれをとり出した。銀色の小さなケースだった。「シガレット・ケースかな?」と言つて、彼は蓋をあけた。

「おつ!」あけた江原だけではなく、のぞきこんだ浅田も伊藤も、同時に声をのんだ。

「ダイヤモンドだ!」江原が叫んだ。

まばゆいばかりのダイヤモンドが、ぎつしり詰まつていたのである。

江原はその一粒をつまんで、かざして見た。

「すげえ!」



「粒も大きいな」と浅田が言った。「何カラットあるかな?」「おれはダイヤのことなんか知らねえ」江原はぶつきら棒に言った。

「おれの知ってるのは、商売の電気器具だけだ」

伊藤も商売の織維製品以外には、とんと不案内であった。しかし、その形といい光り工合といい、見事なダイヤであることにまちがいはない。

「大丸で一粒七十万のやつがあった」

と浅田が言った。山男の彼にとって、ダイヤの知識はその程度であろう。

「ざっと百粒以上はいってる」江原は溜息をついた。

「十粒で七百万、百粒で七千万……いや、一粒十万としても十万以上だ……」

「とにかく大したもんだ」と浅田が言った。

「どうする?」と江原がきいた。

「どうするって? 早く降りて連絡せにやいかんな。遺体を収容するのが第一だよ。遭難の通報は登山者の義務なんだ」

「このダイヤはどうするつてきいてるんだよ?」江原がさげすんだように言った。

「そりや、もとどおりにしといたほうがいいよ」浅田はしばらく考えてから「しかし貴重品だから万一一……」

「おれたちが持つて行つてやろう」

薄笑いをうかべながら、江原は言った。

「そうするか」

浅田はなんのわだかまりもなく賛成した。やがて、例の難所にさしかかった。

「ひでえところだな」これから行こうとする断崖の道を眺めて、江原は立ちどまつて一と息ついた。浅田はさきに歩いて行った。

江原は首にかけたタオルをおもむろにはずし、その両端をぐつと握りしめた。満身の力をこめて、そして、足をしのばせて、浅田のうしろからおどりかかつた。

浅田の首にまきつけたタオルをゆるめると、江原は一歩とびさがった。浅田は崩れるように倒れ、そこにながながとのびて横たわった。

「こいつは堅造だから、どうせ話がわからねえだろうと思っててな」江原は浅田の死体を崖下の急流に蹴おとし伊藤のほうをかえりみて、「いいか、おれたちや飛行機の残骸なんて見ちゃいねえんだぜ、わかつたな？」

伊藤はごくりと生唾を呑みこんで、辛うじてうなずいた。

「ものわかりがいいじやねえか、おめえさんは、さ、さきへ行きな」

臆病者の伊藤が、断崖絶壁のあいだの狭い道を、すたすた歩いたのは奇蹟に近い。彼は「自然」への恐怖よりは、うしろの兎の「人間」の殺意をおそれた。だから一尺幅の危険な道もおそろしくはなかった。

江原の殺意に、伊藤は絶望した。それがあまりにもあきらかだつたから。そして、あまりにも人間のにおいがしそぎたから。彼はじめて「自然」を愛した。

「どうせ助からない！」

そう観念した時、彼はもはや臆病者ではなくなつた。

歩いているうちに、彼は殺されるまえにするべきことがあるのを悟つた。勇者のすることである。彼は落ち着き勇者に変貌した。

道の中途で彼は立ちどまつた。絶壁を仰いでむきをかえ、そしていちど断崖に目をおとした。ちつともこわいとは思わなかつた。

猛烈な勢いで、彼は突進した。

行くてには、銀色のケースを恭々しく手にした江原がいた。彼はその目に言いしれぬ恐怖の色をうかべた。生まれはじめての恐怖かもしれない。むろんそれが最後の表情だつた。——

はるか下で、二つの物体が岩にくだける音がした。づいて、かわいらしい小さな音。岩のそばに流れのゆるやかな淀みがあつた。墜落したとき、江原の手から離れ

たケースの蓋がひらき、ダイヤがそこにまき散らされたのだ。清流にきらめき冰くダイヤの群れ、美しかつた。しかし一瞬ののち、清流も真つ赤に染まつた。

ダイヤは束の間の煌きをみせて、水底深く沈んで行つた

ラフト中尉の夫人は甲子園の自宅で良人の遭難をきたかされた。彼女はテーブルにうつぶせて泣き崩れた。凶報通知の辛い任を帯びて来たウイルソン軍曹は、慰めの言葉もないまま、彼女のそばに立ちつくした。弔慰金、保険金など合計十六万ドルはいることなど、どうしてこの場で口にできよう。

未亡人は肩をふるわせ、涙のあいまに、とぎれとぎれに悲嘆の言葉を口からもらした。

「可哀そなメリイ、パパはもう帰つてこない……あんなに可愛がつてくれたパパが……クリスマスのお芝居も見てもられない……女王の役をもらつたのに……王冠を飾るきれいな模造宝石を……東京で買ってきてやるとあんなに約束したのに……パパは……パパは……」

もだえる彼女の手がテーブルの上を払つた。紙と綿で造つた王冠が、カサと床におちて、ころころとストーブのそばにころがつた。

(終)



陳舜臣さんのこと

出身神戸を舞台に中国人

華商の生態を描いた推理小説「枯草の根」で第7回江戸川乱歩賞受賞。昭和18年大阪外語(現大阪外大)インド語科卒、終戦まで同校の西南アジア語研究所の助手、その後泰安公司勤務。蔡夫人と

一男一女がある。現住所はし神戸生田区北野町一



## 長崎堂本店 元町六丁目

大人、こどもはもちろん、みんなに贈って喜ばれるお菓子といえれば、まずあの風味ゆたかな味で知られる長崎堂本店のカステーラがある。

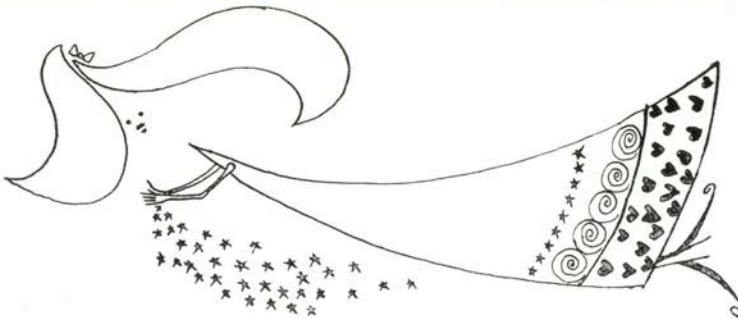
神戸は長田区大橋五丁目の商店街の角に堂々と建つ長崎堂本店は創業四十数年を数える、伝統とシニセを誇るカステーラ専門店である。この本店をキーポイントに、元町六丁目の支店をはじめ、神戸大丸、神戸阪急、神戸新聞会館そして遠くは姫路のやまとやしきにとその直売店をもつといふ手びるさま。

いまの社長、加藤正勝氏は二代目。同店のカステーラは、材料の吟味、ことに砂糖とタマゴに全神経を集めてらっしゃると。そして職歴十五年というベテランが真心こめて焼いているカステーラは、神戸っ子はもとより、和歌山岡山、北は北海道にまで好評を呼び、プレゼント・シーズンのお歳暮やお中元どきは、もちろん、年中こんがりとキツネ色をしたカステーラが、スギの木箱に納められ西東にと旅をするという。

「私どもでは、つねに材料の吟味はもとより、技術面にも研究を重ね、品質についてはお客様に絶対の自信をもってお売りしております。またお値段の方も勉強させていただいています。カステーラの魅力は、やはりどなたの口にも合う味ということと、ながもちであるということではないでしょか。ほんとうに贈つても、またもらつても喜んでいただけのお菓子としては最高だと自信をもつております。」大橋本店で営業面を担当してらっしゃる三代目(?)高橋さんは、「こう話してらっしゃる五十嵐



(写真は清潔なフンイキの元町店)



## 表紙の言葉

ピンク色の空に散逸する  
白い形の変容  
残り少ない年の瀬を  
ゆりうごかす白い陽は  
むらさきの光に包まれた  
キリストの幻影を映す  
それは私の見た  
神戸の12月である

中西勝  
(二紀会)

## 神戸の女性

枝川英子さん(22才)は神戸銀行にお勤めのお嬢さん。とても音楽ファンでセミクラシックがお好き、とくに、エキゾチックな神戸の街を散歩したり、教会のあたりを歩いていると楽しいとのこと。趣味はお料理に手芸と多彩、お住いは須磨。

撮影 杉尾友士郎

ピンク色の空に散逸する  
白い形の変容  
残り少ない年の瀬を  
ゆりうごかす白い陽は  
むらさきの光に包まれた  
キリストの幻影を映す  
それは私の見た  
神戸の12月である

阪本勝氏の「れんさい隨想」の  
いきさつが、ついに公開されました。  
阪本氏にはご面倒でも「神戸っ子」のため、「れんさい」と  
いう名の魔物を当分背負っていた  
だかねばなりますまい。これもふ  
しきなご縁とおゆるし下さい。  
・はなやかさを……というので宝  
塚の黒木ひかるさんをゲストに座  
談会「アレこれ」を企画。この日

黒木さんは、朝五時からコマ公演  
のケイコ引きづき大劇場の本公

演に出演という重労働?にもかか  
わらず、公演後、わが「神戸っ子」

のためだけつけてくださいま  
した。さすがにベテランです。話

題も豊富、なによりもそのキモノ  
姿は美しく、かつ艶麗でした。

・神戸っ子の木田ヨシ子さんいま  
や人気最高の橋幸夫さんの対談わ

・表紙は、九月号でみなさんから  
ご好評をいたいた中西勝氏に再  
登場ねがいました。詳しくは「表  
紙のことば」をごらん下さい。

小さく描かれた人物は、キリスト  
様とか。そういえば先生は、キリ  
スト様に生きうつしーもちろん人  
柄もです。

・阪本勝氏の「れんさい隨想」の  
いきさつが、ついに公開されました。  
阪本氏にはご面倒でも「神  
戸っ子」のため、「れんさい」と  
いう名の魔物を当分背負っていた  
だかねばなりますまい。これもふ  
しきなご縁とおゆるし下さい。

・はなやかさを……というので宝  
塚の黒木ひかるさんをゲストに座  
談会「アレこれ」を企画。この日

黒木さんは、朝五時からコマ公演  
のケイコ引きづき大劇場の本公

演に出演という重労働?にもかか  
わらず、公演後、わが「神戸っ子」

のためだけつけてくださいま  
した。さすがにベテランです。話

題も豊富、なによりもそのキモノ  
姿は美しく、かつ艶麗でした。

・神戸っ子の木田ヨシ子さんいま  
や人気最高の橋幸夫さんの対談わ

ずか十分間のインタビューに、充  
分な話がとれず残念。二人とも、  
ハキハキと素直でとてもフレッシュ  
な感じ。木田さんには数少くな  
い神戸出身の歌手として大いに活  
躍してほしいのです。

・この十二月で「神戸っ子」は十  
号目を数えるようになります。  
これもみなさまのお蔭と感謝して  
います。くる年、62年もこれまで  
と変わりなくかわいがってください  
ますように!。(I)

## 月刊「神戸っ子」案内

☆月刊「神戸っ子」を毎月御講  
読下さいます方、神戸を離れてい  
るお友達にプレゼントなさりたい  
方は編集室宛にお申込下さい。

6ヶ月分・500円(送料共)

☆誌上紹介の各神戸の銘店には  
お客様へのサービス品として「神  
戸っ子」がおかれています。  
☆「神戸っ子」をお求めのさいは  
左記の本屋さんでどうぞ。

文洋堂・漢文堂・流泉書房  
・丸大筋前角・京町3丁目・元町  
・東洋堂・文堂・丸大筋前角

月刊「神戸っ子」12月号・発行/S 36.12.15・編集/五十嵐恭子・発行/小泉康夫

編集室/神戸市葺合区御幸通8丁目9ノ1 国際会館1階・TEL 7037・頒価70円

しあわせをあなたの家庭に運ぶ  
よい商店・よい商社との招待

神戸日野自動車 表2

大丸 北行興業表K 表2

日赤会館 マキシム 表2

連月堂

伊藤忠業株式会社

田嶋興業 K.K.

みよしや

永田良介商店

鶴田青吉洋服店

元町パサント

寺本謙 キヨンズヤ屋

松下電器産業 K.K.

イクシンドウ

ハチゼ

タジマ

トーレイ洋装店

太田ベッド店

神戸屋

スコット

千秋堂

三恵洋服店

太田ベッド店

美田時計店

エスケーニュートン

芙蓉

長崎洋本店

元町毛織

サノヘ

アグス

神戸シティム

夫婦製縫

萬葉

アルファ

長崎堂本店

マキニリード

国際コンタクトレンズ販売所

ちんがる屋

大黒庄亭

- 本誌広告により広告主へ直接御注文やお問合せの際は「神戸っ子」編集室にご用意下さい。
- 広告主の住所不明な時は「神戸っ子」編集室にご用意下さい。お取次いたします。
- 「神戸っ子」に広告掲載御希望の向きは「神戸っ子」営業部宛御照会下さい。「神戸っ子」編集室

# 環境衛生は

## ゴミ箱から！

フタがキツチリしまるので、ハエやゴキブリがはいりません。ツギ目がないから洗たくもOK：ポリペールは衛生的なゴミ容器です。神戸の環境衛生は清潔なゴミ箱からおはじめください。



硬質ポリエチレン製  
新家庭にぜひお備え下さい



# ポリペール

プラスチックの積水化学

発行所／神戸市兵庫区御幸通八丁目九ノ一  
昭和三十六年十二月十五日発行  
毎月一回

編集／五十嵐恭子  
神戸国際会館一階

TEL(22)7037  
発行／小泉康夫  
領価七〇円  
(送料20円)



「暖かい宝石ですね、真珠は」と言って、石井好子さんはロマンチックな目をされた。そして「外国で日本人にあうでしょう。たいてい真珠をつけますからね。まあ、真珠と言えば日本の代表だから」とおっしゃる。たしかにミキモトパールは日本を代表する宝石です。

御木本真珠店  神戸店：神戸国際会館内 大阪店：新大ビル内



カタログお送り致します。雑誌名御記入にてお申込下さい